

福建省西部地域の洗骨改葬 — 沖縄との若干の比較もかねて —

蔡 文高[※]

はじめに

洗骨改葬は、死体の第一次的処置をして一定の期間を経て骨化した後、遺骨を清める第二次的処置を施すことによって再び墓に戻すか新たな墓に埋葬する葬法で、日本の沖縄文化圏、朝鮮半島、南部中国や、東南アジア諸地域などに広く見られる葬法である。

日本においては、洗骨改葬は、沖縄文化圏の葬制を考える場合にも、また日本全土の葬制を考える場合にも、大きなキーワードとなっている。このため、沖縄文化圏の洗骨改葬は早くから注目され、これをめぐる研究は非常に盛んになされてきた。

中国において、洗骨改葬の歴史は原始時代に遡ることができる。そして、洗骨改葬は現行習俗として今でも南部中国の江西省南部、福建省西・南部、広東省東部などの地域に行なわれている。

沖縄文化圏は歴史上、中国と深い関係を保っていたため、その歴史・民俗文化は大きく中国からの影響を受け続けた。民俗文化の一部である葬送習俗も、中国から影響を受けたことは推測できる。したがって、沖縄文化圏の洗骨改葬が、文化交流の多かった南部中国、特に福建省の洗骨改葬とどのような関係を持っているのかなどの問題は、早くから日本の研究者に注意され、比較研究がなされてきた。

研究の進展に伴い、沖縄文化圏の洗骨改葬がその起源成立にあたって、南部中国、特に福建省の洗骨改葬から影響を受けていたという認識は多くの人に受け入れられるようになってきた。しかし、そうは言っても、比較研究はまだ十分とは言えない。

今までの、日本における両地域の洗骨改葬についての比較研究は、研究の動機が主に沖縄文化圏の洗骨改葬の起源成立を解釈するためであるので、ほとんど両地域の洗骨改葬の類似面に注目して影響関係をめぐって行なわれている。また、南部中国、特に福建省の洗骨改葬を論じる際、考古資料・文献資料はよく使うが、現行習俗については、福建省のどこかを歩いて亀甲墓を見物した程度にとどまっていて、詳細な現地調査を行なった上でまとめた論考が、管見による限り見当たらない。この点においては中国でも同じような問題が指摘できる。

しかし、沖縄文化圏の洗骨改葬と南部中国の洗骨改葬は、歴史上密接な関係を持っていることは予測しえても、文化的・社会的・自然的な生活環境が異なっているために、それぞれの変化が激しく、現在に至って差異点がかなり多い。このため、両地域の洗骨改葬の比較研究は、双方の影響関係の追究のほかに、現行習俗の諸要素を比較検討し、差異を明らかにさせ、その差異発生の要因まで追究する必要性もある。

※成城大学大学院文学研究科

但し、このような比較研究は、詳細な現地調査に基づく資料によらない限り、展開させるのは困難なのである。そのため、筆者はできるだけ南部中国の洗骨改葬を系統的に調査整理しようと考えた。そして、1995年中、筆者は2回にわたって福建省西部地域の長汀県でフィールドワークを行った。南部中国、少なくとも福建省西部地域の洗骨改葬のフィールドワークは今までに行われたことがなく、筆者のこの調査が恐らく初めてのものであろう。

本稿は、このフィールドワークによって得た資料を、将来における洗骨改葬の実証的な比較研究のための南部中国側の基礎的な資料の一部として掲げると共に、それに基づいて福建省西部地域における洗骨改葬の意味を明らかにし、あわせて、沖縄文化圏の洗骨改葬との若干の比較をも試みようとするものである。

本題に入る前に、本稿で用いる「洗骨改葬」の用語について簡単に説明しておく。

洗骨改葬習俗を表現する際、研究者は彼らの好みと研究目的によって、さまざまな言葉を用いている。これは日本においても、中国においても同様である。日本の場合には「洗骨習俗」「洗骨儀礼」「改葬」「二次葬」「複葬」「再葬」「二重葬」など、中国の場合には「洗骨葬」「二次葬」「複葬」「検骨葬」「検骨改（再）葬」「拾骨葬」「改葬」「遷葬」「移葬」などが用いられてきた。これらの用語はいずれも本稿で扱う洗骨改葬のことを指しているか、またはそれに関わるが、用いられた都度によっては持つ意味が異なることもある。

そこで、混乱を避けるために、本稿では「洗骨改葬」という言葉を統一して用い、その意味を次のように規定する。

洗骨：本来、水で遺骨を洗って清めることを指してきたかと思われるが、実際には、沖縄文化圏の「洗骨」は酒で洗ったり、紙か布で拭いたりして清めるなどのこともよくある。これは沖縄文化圏だけではなく、南部中国においても同様である。このため、本稿でいう「洗骨」は水で洗うことに限らず、酒、紙、布、炭火など（一種に限らない）を用いて、遺骨を清めて甕などの容器に納めることを指す。

洗骨改葬：遺骨を清めることと清めた後再び墓に戻すこと、または新たな墓に埋葬するまでの一連のことを指す。

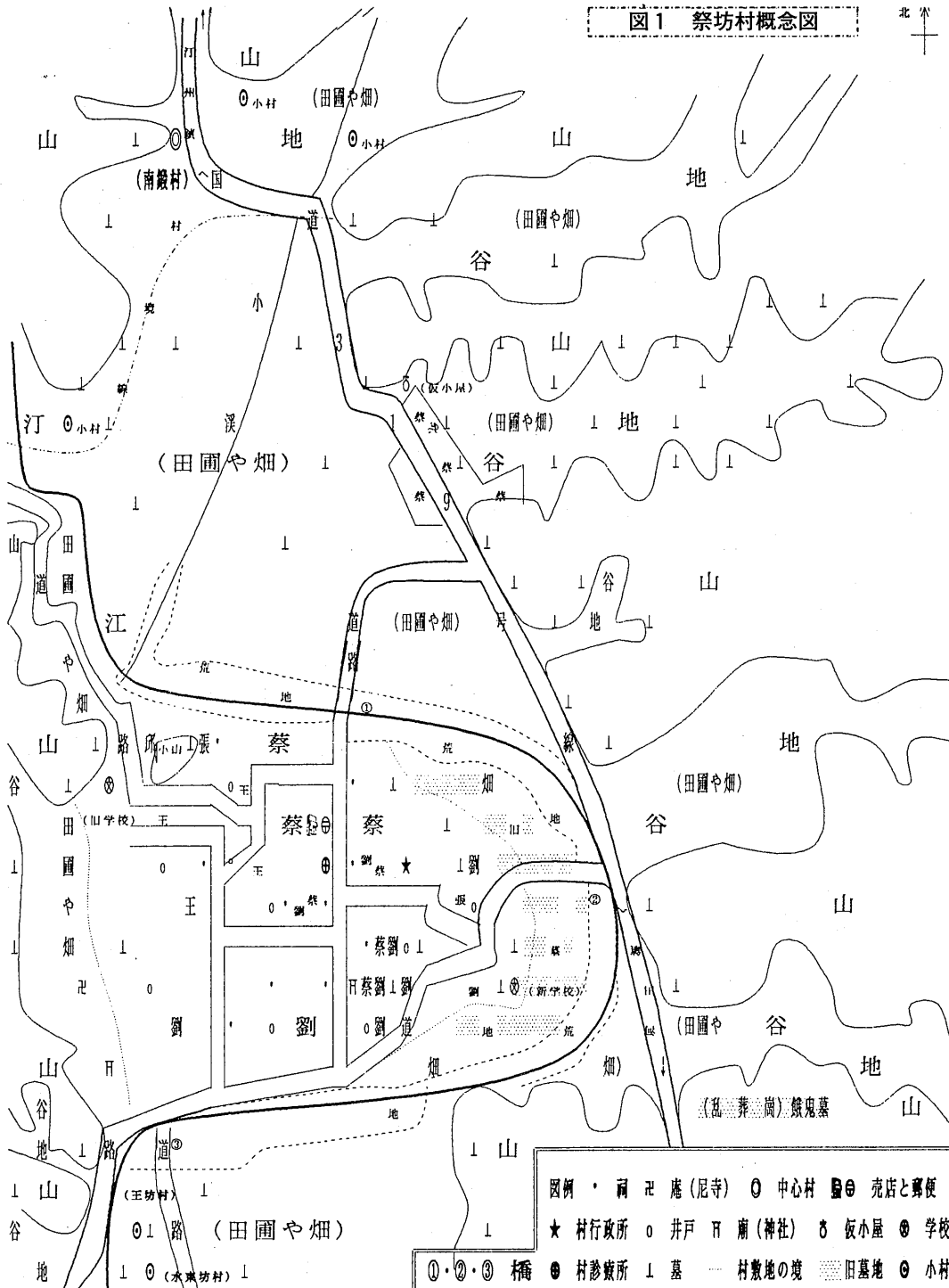
一 調査地概況

1 地理、歴史、生業

福建省西部は一般に「閩西」と呼ばれる。歴史上、ここに「汀州府」が設けられ、8県を包括していた。府の官公署は、今回の調査地である蔡坊村の属する長汀県にある。歴史上、汀州府に所属した8県は現在、龍岩・三明という2つの行政地区に分割された。本稿の福建省西部は歴史上汀州府に所属した8県を範囲とする。

汀州府は、歴史上、漢民族の一部である客家の人々の主要な居住地、または遷移の重要な集散地である。現在ここにの住民のはほとんどは客家である。この地域の面積及び人口については詳

図1 祭坊村概念図



しい統計資料がないため、正確に判断することができないが、その面積はおおよそ福建省全体面積（12万平方キロメートル）の7分の1くらいで、人口も省人3116万（1992年）の7分の1くらいである。

筆者が調査地を選んだ蔡坊村は福建省長汀県河田鎮にあり、武夷山脈西端に位置する。村は県庁所在地の汀州鎮から、やや南東20キロ、河田鎮から北西5キロぐらいの所にある。蔡坊村の概念図は図1に示す通りであるが、国道319号線は村の東側を通過する。この319号線は、県の外へ連絡する最も重要な道路である。そして、福建省内の4つの大きい川の1つ、西部の一番大きい川である汀江は、村の3面を囲んで、流れていく。この汀江は南向きに流れ、広東省東部に入ると、韓江と称し、潮州を通って南海に入る。国道を開発する前、汀江は福建省西部の重要な水運交通、長汀県の外への最も重要な通路であった。

蔡坊村がいつ開発されたかについては、残されている確実な資料があまりないためはっきりわからない。しかし、明・崇禎10（1637）年に完成した『汀州府誌・祠廟郡治』巻6の「東林寺」の条に次の記事がある。

青泰里蔡坊。萬曆間。里人蔡長賢平寺址。得古碑。勒「唐大觀間建」。（下略）

この記事の文意は次のようである。東林寺は青泰里の蔡坊村にある。萬曆年間（1572～1620）、村人蔡長賢は寺址を均す時に、古い碑を発見した。（碑の上に）「唐大觀間建」の字が刻んである。

文中の「唐大觀」はどこか間違っていると思う。「大觀」という年号は唐時代にはない、宋の徽宗（1107～1110）の年号である。もし、碑は唐時代に立てられたものとする、「大觀」という2つの文字のうち、どちらが忌諱を避けるために代り字として使われたのであろう。これを考証することは本稿の目的でないため、留保して、「大觀」を宋の年号としよう。その時に、寺を立てたとすれば、村はもう開発されていたことが推測できる。そうすると、蔡坊村の歴史は少なくとも900年くらい経っていることになる。また、村の南にある山に王姓の人々の先祖の墓も残っているの、900位の歴史を持つという推測には無理がない。

山中谷地にある蔡坊村の生業は、農業を初め、煉瓦・瓦づくり、大工、裁縫などをやりながら、養鶏、養豚もしている。昔には舟運への従事も一つの仕事であったが、今では水運の廃棄と共にこの仕事はなくなってしまった。農業は稲作と畑作と、両方ともする。田圃と畑は、川の北部の小盆地と周囲山間谷地にある（図1参照）。農産物としては、稲、里芋、さつま芋、山芋、大豆、油料作物などがあり、年間2回耕作できる。農耕の暇には、男が出稼ぎする。

2 村の戸数・人口と社会組織

行政上の蔡坊村は本村以外、王姓が集まっている「王坊」と范姓が集まっている「水東坊」という2つの小村が付属している。しかし、今回の洗骨改葬についての調査は本村だけで行った。以下、蔡坊村という場合には特に断らない限り、この本村だけを指していることを、まずお断りしておきたい。

行政上の蔡坊村は1994年の『河田鎮国民統計資料』によると、人口3832、戸数709で、24個村

民小組に分けられている。しかし、人口の数字は必ずしも正確といえない。それは、今中国の「一人子政策」と関わって、登録していない子供の人口も少なくないからである。だから、実の人口

表1 蔡坊村の組数と戸数

村	組・戸数	組 数	戸 数
蔡 坊		20	約600
王 坊		2	〃 60
水 東 坊		2	〃 50

『河田鎮国民統計資料』（1994）による

数は少なくとも4000人くらいと考えてよい。このデータは行政上のものであるから、もちろん付属小村の「王坊」と「水東坊」の人口と戸数も含まれている。これをその中から引くと、調査対象とした蔡坊村の人口と戸数は3500～3600人で、600戸ぐらいになる（表1参照）。そして、この600戸くらいが20個村民小組に分けられている。

本村の中には15姓の人々が生活している。各姓の人口割りは大体次のようである。劉：約9組で1500人くらい、蔡：約7組で1200人くらい、王：約2組で400人くらい、丘：約2組で300人くらい。ほかの各姓はばらばらに各組に編入されている。分散している各姓の人口は、張：約10戸5,60人、頼：2戸10人くらい、戴：3戸20人くらい、曹：1戸7人、李：2戸10人くらい、梨：1戸3人、饒：2戸10人くらい、呉、官、俞、関（元は蔡の姓で、ある事によって姓が変わったようである）各1戸5人くらいである（表2参照）。

村の構成単位は、従来、宗族であったが、1949年以後には、土地・資産の公有化、そして、「人民公社」化するにつれ、村は生産大隊と改称され、従来の宗族単位を潰して、20個ぐらいの生産小隊を編成した。その後、生産小隊単位が1950年代末から1970年代末までに続き、1980年代になると、農村改革政策により、同じ数ぐらいの生産互助組に再編成された。現在、村の社会組織は、行政と生産の面ではこのように生産互助組に編成されているが、民俗的生活の面には、まだ血縁関係で結びついた宗族的つながりが強い。

前に言及したように、蔡坊村には、蔡、劉、王、邱、張等の姓の人々が居住している。村の地割りははっきりしていないが、普通、各姓が比較的集中している所を、その姓を用いて「…屋」と名付ける。例えば、蔡姓が集まっている所を「蔡屋」と称する。この「…屋」

表3 蔡姓の戸数と人口

蔡姓	戸籍人口	戸 数	人 口
上	下屋巷	約110	約550
蔡	上門頭	〃 50	〃 250
屋	祖信屋	〃 30	〃 150
下蔡屋		〃 50	〃 250

は屋号ではなく、一族の居住地を指している。「蔡屋」を例にとると、その中はまた表3のように「上蔡屋」、「下蔡屋」に分かれている。「上蔡屋」は更に、「下屋巷」「上門頭」「祖信屋」などに分けられる。これは宗族の内部構成に関わって、血縁の近い者同士で構成したグループ（「房」という宗族の分節組織）が居住している所を示している。

表2 蔡坊村蔡坊の姓別人口

姓	組	人 口
劉	9	約1500
蔡	7	約1200
王	2	約 400
丘	2	約 300
張	上	50～60
頼	の	約 10
戴	各	約 20
曹	組	7
李	に	約 10
梨	分	3
饒	散	約 10
呉	し	約 5
官	て	約 5
俞	い	約 5
関	る	約 5

3 墓の用地及び墓の形態

(1) 墓の用地について

墓は一般的に山坂や山裾などの耕地にできないところに建てられるため、広い範囲に点在している。村には、正式な共同墓地がない（この村だけではなく、ほかの村もほぼ同様である）。但し、村の敷地の東部と東南部の村と川の間には、昔から、誰でも墓を作ることができる、そして、他の場所よりもここに墓が多く集中したので、ここが次第に共同墓地らしくなっていった。しかし、1970年代の「農業学大寨」（農業の有り様は大寨村に学ぶべき）、「開荒造田」（荒れ地を開墾して田圃や畑を造ろう）というような政治スローガン、生産運動と連動して、ここに学校を建て直すことによって、この正式でない共同墓地がなくなってしまった。また、従来平地のあちこちに建てられていた墓は1960年代の「墳墓上山運動」（墳墓を山に移し、墓地を耕地に譲るという政府によって提唱された耕地開発運動）と国道319線の道路工事によって遷移されたり、潰されたりしたこともあった。

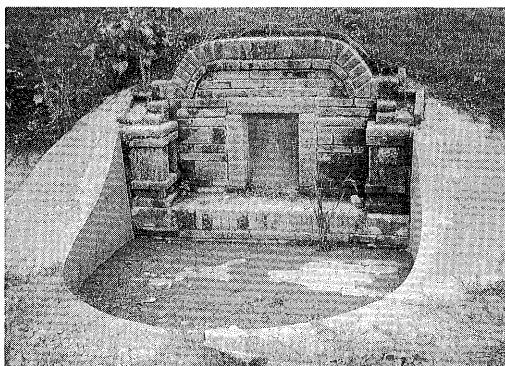
従来、田圃や畑、山、森などはそれぞれ私有地であった。したがって、土地が私有の時代には墓は私有地に建てられた。1950年代、私有地は私有財産（日常生活に必要なものを除く）の「公有化」「人民公社化」によって「公」の物になり、各生産小隊に分割された。生産小隊が所有した土地は、私有制時代に、必ずしもこの生産小隊に入っている各戸の所有していた全ての土地の組み合わせではない、対応していない場合が多い。しかし、墓の用地は現在所属している生産小隊の所有地であるか否かに拘らず、一般に昔の私有地を利用している。このことは公的には認められていないが、慣習的には認められている。

1980年代以後、政府の農村改革政策により、集団的耕作をやめ、「生産責任制」「分田到戸」（田圃や畑を戸ごとに分ける「包産到戸」（生産任務を戸ごとに請け負わせる）を実行すると共に、田圃、畑、山、森などは、戸ごとに分けられた。しかし、戸ごとに分けられた田圃、畑、山、森などは、昔のようにその戸の私有物になるのではなく、生産のために一時的に管理させているに過ぎない。そのため、現在、戸ごとに分けられた田圃、畑、山、森などの敷地の範囲も、ほとんど私有時代に所有していた元のものと対応していない。このようになって、墓地の選択利用だけは生産小隊時代と同じである。しかし、同じ土地に二重の使用権（生産使用権と墓を建てる慣習的使用権）が存在していることは争いの種にもなり、現在、墓地の問題は複雑になっている。

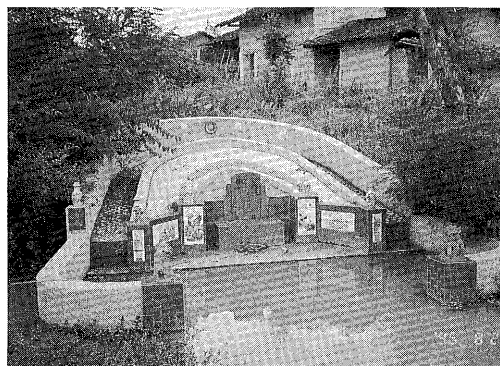
このほか、仮墓と正式な墓との用地の関係について述べると、正式な墓は仮墓とは別のところに建てられる場合がごく一般的であるが、仮墓の敷地の風水が良いと思われた場合には、仮墓の敷地を利用して正式な墓を建てることもある。但し、このような例は極めて少ない。

(2) 墓の形態

福建省西部では墓のことを「地」と呼んでいる。墓は仮墓と正式な墓に分けられる。仮墓は死体を第一次の処置する時に建てられたもので、永遠的な物ではなく、一時的なものである。死体の第一次の処置をする仮墓はただの土で作り、石碑を建てないため、墓の形をなしてはいるが、き



〔写真1〕 亀甲墓・その1
蔡坊村の某家の墓。墓後部の隆起状部分には煉瓦やセメントを使用していない



〔写真2〕 亀甲墓・その2
蔡坊から3キロくらい離れた「南鍛」という村のある家の墓



〔写真3〕 亀甲墓・その3
長汀県官公署所在地の汀州鎮のある家墓



〔写真4〕 仮墓と仮墓参りの様子。
死者はこの男性の父親

れいではない（写真4参照）。

正式な墓は洗骨した後建てられたもので、写真1～3に掲示しているような、いわゆる亀甲墓である、写真1の墓は比較的古形なもので、よく見られるものである。写真2と3、特に2の墓は近年に建てられ、数少ない形もので、1949年以前、台湾・香港・海外に行き、今でも台湾・香港などに居住している人々が建てたもので、経済力もある上に現住地の方式の影響があるためか、この地域の本来の墓の有り方と少し異風なものである。墓の種類には1人墓、2人墓、3人墓などがあり、1人墓の方が圧倒的に多い。2人・3人墓には墓碑を人数分に立てる場合もあれば、2、3人が入っていても墓碑は1つだけ立て、名前だけを人数分に刻む場合もある。3人以上の墓は非常に少ない。墓は建てられたら、不可抗力によって潰される場合を除き、日本の南西諸島

のように重複利用のために開けたりされることがない。

墓の大きさは立てられる墓碑の枚数や、死者の社会的地位、墓を建てる時のその家の社会的地位・経済力などによって異なるが、一般によく見られる古風な1人墓を例にすると、おおよそ墓頭部分最高処の高さ110cm、横幅180cm、その前の池状部分の縦方向の長さ180cm、後部の隆起状、即ち亀甲部分の長さ360cmくらいである。

正式な墓の建築材料はセメントのない時代には煉瓦、石、石炭などであり、今は、もちろんセメントも使う。

洗骨して別のところに墓を作る場合には、仮墓を「寄土」という¹⁾。「寄土」というのは「一時的に預かる土」の意味である。仮墓の敷地を利用して正式な墓を建てることは「大柩転小柩」といわれる。

年1回の清明の墓参りには、正式な墓を建てるまでは仮墓に行く。正式な墓が建てられたら、墓参りはここに行くようになり、仮墓は捨てられてしまう。

二 洗骨改葬の事例

1995年4月から9月まで、筆者は2回わたって長汀県河田鎮蔡坊村で洗骨改葬のフィールドワークをした。

筆者が蔡坊村を調査地として選んだ理由は3つある。まず、蔡坊村は筆者の出生地である。筆者がここで生まれ育てられ、18年間くらいここに生活していたため、必要な調査地の地域的な民俗知識をある程度持っている。次に蔡坊村は国道のそばにあるために交通が比較的便利で、調査に通うのに便利である。最後に、蔡坊村は村落として、比較的大きく、人口が多い上に、歴史も古いので、豊富な民俗文化を積み重ねていたと思われる。

調査対象者（話者）の選択については、次の通りである。初めに何人かの年取った村人に全体的な話を聞いて全体のアウトラインをつかみ、その後、村中心部の家々を訪ねる。中部の辺は、はっきりしていないが、イメージ的には蔡姓と劉姓の境のようである。蔡、劉両姓は村人口の75パーセントを占めているため、蔡、劉両姓の人々の洗骨改葬の状況を明らかにすれば、他各姓の人々の洗骨改葬の状況も伺える。このように考えて、村中心部の家々を訪問対象として調査を行った。表4の「福建西部洗骨改葬調査データ表」はこのフィールドワークで訪問した20軒くらいの家の資料によって作成したものである。

表4 福建省西部洗骨改葬調査データ表

死者状況	性	年	死亡	婚	子	供	洗	死後	仮墓と 墓場所 同 異	儀式	洗骨を する者	参加者	洗 骨 し な い 原 因	備 考	
家 死者	別	齢	年代	姻	男	女	骨	何年							
A	A 1	女	52	1970	○	3	×	×					経済的・風水的原因		
B	B 1	男	72	1961	○	4	×	○	4	×	線香燃燭	職人	子供職人	夫婦、同日した。 他死者若干無記憶	
	B 2	女	68	1961	○	4	×	○	4	×	々	々	々		
C	C 1	女	93	1944	○	不	明	○	16	×	×	々	曾孫玄孫	政治、経済的原因で洗骨時間 を長くした。	三人同墓
	C 2	男	53	1958	○	3	10	○	32	×	×	々	子 孫		
	C 3	女	—	1960	○	3	10	○	30	×	×	々	々		
				他の死者若干名、洗骨をしなかった。										経済的・風水的原因	
D	D 1	男	—	—	○	5	×	×					子孫繁栄しているために、 「虧房分」に配慮する。		
	D 2	女	86	1979	○	5	×	×							
E	E 1	女	27	1949	○	3	×	○	16	×	×	長男	長男、手伝者	経済的原因で自 分がした。火使ず	
	E 2	男	32	1955	○	3	×	×					若すぎて、伝染病死の故。		
F	F 1	男	64	1960	○	2	1	○	5	×	×	職人	本人職人	洪水で墓潰れの 故早くした。同墓	
	F 2	女	54	1960	○	2	1	○	5	×	×	々	々 々		
G	G 1	男	70	1947	○	3	×	○	8	×	×	々	々 々	風水の原因で多 次改葬した。	
	G 2	女	81	1959	○	3	×	○	10	×	×	々	々 々		
H	H 1	男	65	1982	○	2	3	×					経済的原因で、今までしなか った。今後するつもり。		
	H 2	々	47	1988	○	2	1	×							
I	I 1	男	49	1966	○	1	2	×					原因については話さなかった		
	I 2	々	73	1922	○	1	2	×							
	*	話者の祖父母は彼が生れる前に死亡して洗骨されたが詳細は知らない。墓がある。													
J	J 1	男	81	1989	○	4	1	×					後2、3年経ってからやる。		
K	K 1	々	73	1979	○	1	×	×					熱心しない、墓より家優先		
L	L 1	々	69	1975	○	3	1	×					仮墓は良い墓でやる必要がない 今後子供に任せる		
	L 2	女	57	1987	○	2	2	×							
M	M 1	々	63	1984	○	2	1	×					経済的原因で、今後にする		
	M 2	男	69	1989	○	2	1	×							
N	N 1	々	65	1976	○	×	×	×					子孫がいない。	話者は死者の養女	
O	O 1	々	49	1992	○	4	1	×					必要な年数経っていない。		
P	P 1	々	61	194	○	2	3	×					政治・経済的な原因でこれか ら考える		
	P 2	々	67	1969	○	1	4	×							
Q	Q 1	女	33	1948	○	3	×	○	8	×	×	職人	忘れた	結婚しなかったで子供いない 々 々 もう少し時間経ってからする	
	Q 2	男	36	1974	×	×	×	×							
	Q 3	々	15	1976	×	×	×	×							
	Q 4	女	66	1987	○	2	2	×							
	Q 5	々	76	1988	○	5	2	×							
R	R 1	々	無記憶	○	1	2	×						未説明	親兄弟三人同墓	
	R 2	男	々	々	○	1	2	○	覚えていない						
S	S 1	男	知らない	○	2	1	○	親世代のことで分からない					R 2の兄弟		
	S 2	女	々	々	○	2	1	○	々	々	々				
	S 3	男	61	1982	○	3	3	○	9	○	×	職人		兄弟職人	「大転轉小転」
T	T 1	男	知らない	○	3	2	○	話者子供頃のことで知らず					「分からない」と話者が言った 後で一緒にするつもりと考え ている。	R 2の兄弟	
	T 2	女	々	々	○	3	2	×							
	T 3	男	67	1985	○	1	3	×							
	T 4	女	69	1988	○	1	3	×							
U	U 1	男	53	1986	○		1	×					これから考える	UはU1の甥で、 U1の嗣子である。	
	U 2	女	58	1989	○		1	×							
説明	※ ○=あり ×=なし 「仮墓と同、異場所」の場合は○=同、×=異														

筆者の調査資料より作成

次に、この調査データ表の中のいくつかの代表的な事例を紹介しておく。

【事例 1】 B 家。死者 B 1 と B 2 は夫婦で B の親である。B 1 と B 2 は同じく 1961 年に死亡し、洗骨改葬は 4 年後に行なわれた、この年に行なわれた理由は、2 人の洗骨改葬がこの年にしないと、洗骨改葬にいい年がしばらくめぐってこないと言われたからである。そして、2 人の仮埋葬はいずれも浅埋葬であるため、死体が早く骨化できている。洗骨の日と時刻は風水師に依頼して決まった。洗骨する前に、線香、蠟燭を燃やした。洗骨に参加した者は B の兄弟（即ち、B 1 と B 2 の子供）4 人のうち 3 人である。もう 1 人は干支の具合が悪いと、参加してはいけないと言われたので、参加しなかった。遺骨を清めた人は職人である。

【事例 2】 C 家。C 1 は C の曾祖母で、C 2 と C 3 は C の祖母である。C 1 が洗骨改葬の時期になった頃、C 家には「地主」という政治的レッテルが付けられたため、C 1 の洗骨改葬が普通の通りにできなくなり、その後、死亡した C 2 と C 3 の洗骨改葬も当然同じ理由でできなくなった。1980 年代になってから、政治的にレッテルの配慮がなくなり、洗骨改葬は自由にできるようになったが、経済的な問題が現れてき、洗骨改葬はやむを得ずに 1990 年に延ばしていた。洗骨改葬は本来 C の父親の世代で行なうべきであるが、上述した理由でできなかった。できるようになった時は C の父親が既に死亡していたので、C の世代が洗骨改葬を行なった。洗骨する時は、線香を燃やすなどの儀式はなかった。参加する者は職人のほか、C の兄弟である。遺骨を清める者は職人である。洗骨は普通の通りで行なわれた。C の父親はまだ洗骨改葬の時期になっていない。

【事例 3】 D 家。D 1 と D 2 は D の親である。D と 4 人の男兄弟は、孫も含めてその家族は合わせて何十人もいる。D 1 は 1930 年代の終わりごろに死亡したが、洗骨はいろいろな事情があつてしなかった。D 2 が 1979 年に死亡して、洗骨の時期になった時には、D 兄弟は、子孫が繁栄しているうえに、仮墓もいい墓にできていて、子孫もツイているので、わざわざ洗骨改葬はしない方がいいと年長の親友に言われたので、協議した上で洗骨改葬を行なわなかった。

【事例 4】 E 家。E 1 は E の母親で、27 歳の若い年で死亡した。E 1 の洗骨改葬は国道 319 号線の改道工事によって急いでしたので、日にちの決まりは風水師に頼まなかった。遺骨を清めることは、経済的理由で職人を雇わなかったため、長男がした。また、遺骨を清める時、火を使わずに簡単に行なわれた。E 2 は E の父親で、伝染病で死亡したので洗骨改葬されなかった。

【事例5】 F家。F1とF2はFの親で、同じ1960年に死亡した。F1とF2の仮墓は近いところであって、両方とも5年後に洪水によって潰されてしまったので、洗骨改葬は普通より早く行なわれた。洗骨したF1とF2の遺骨は一つの墓に埋葬されている。

【事例6】 G家。G1とG2はGの親である。G1は死後8年目の1955年に洗骨改葬された。洗骨改葬に参加した人は職人のほか、Gと2人の弟子である。洗骨改葬は風水師に依頼して墓地と吉日吉時を選ぶことから始まる。その後、兄弟3人の干支上の具合を占ってもらった。3人とも干支上の具合がいいため、洗骨改葬へ参加することができた。3人が棺を掘り出し、職人が遺骨を清めた。そして、翌日、墓を造った。G2は死後10年目の1969年に洗骨改葬された。洗骨改葬の手順はG1のとはほぼ同じである。その後、G1の墓は風水の原因で多次改葬された。

三 洗骨改葬の諸過程

1 洗骨までの期間と洗骨をする時期

死体を第一次的処置した後、何年間ぐらい経っていたら洗骨をするかは、同じ福建西部でも地域によって差がある。上杭県では埋葬後8年目ですが、長汀県では埋葬後6～12年経ってから洗骨をする。蔡坊村では埋葬後6～12年経ってから洗骨をすることが普通であるが、事情によって6年未満か12年以上経つこともある。

洗骨までの期間の地域差は地域的な慣習（例えば数字への好みなど）に関わっているかどうか十分な資料がないので、断定はできないが、死体の処置方法に関係あることが推測できる。第一次の処置が土葬である場合は死体を埋める深さによって洗骨できる期間が変わる。蔡坊村のB家の親が浅埋葬であるため、4年で洗骨されたことはこれを裏づけている。

洗骨をする時期も、地域によって多少の違いがある。上杭県では8月1日、ほかの日にする場合には吉日を選んで洗骨をする²⁾。蔡坊村では清明の日と8月1日に洗骨をすることが一般的であるが、これ以外の日にする場合は吉日を選ばなければいけない、そして、正月には洗骨をしてはいけない。

清明の日は古来中国の多くの地域に見られる先祖祭り・墓参りの時期で、この日を利用して洗骨をするのは理解しやすいのである。8月1日も洗骨の良い日とされることは福建西部地域の特徴である。この地域では、8月1日は「大清明」「多天赦」と称され、洗骨に最も良い日とされている。他に、この日に、「白頭公」と呼ばれる草などの植物を採集して餅を作って食べたりする。これを見ると、福建西部地域の8月1日が特別な日とされることは、農耕年中行事に関わっていると考えられる。日本でも八朔は一つの節供であって、稲作に関する行事が行われていた。もしかすると、両者の間には何かの関連があるかも知れない。

2 洗骨の対象者と洗骨者

洗骨対象は伝染病死、疫病死、難産死（地元では「陰宮死」と言われる）、子供の死者を除き、原則としては他の一般の死者が洗骨の対象である。しかし、洗骨は子孫（男に限定する）によって行われるため、子孫がいなければ洗骨してくれる者がいない。このため、洗骨の対象になれるかどうかは、子孫がいるかどうかという条件付であると言ってもよい。子孫がいない死者の洗骨をしてはいけないわけではなく、誰かがやってくれば、洗骨してもいい。しかし、やってくれる者がほとんどいないため、実際上洗骨の対象になっていない。

遺骨を清める作業は、一般に「天王工」と称する喪葬の手伝いを職とする者を雇ってする。子孫は傍にいてだけで遺骨には触れない。しかし、表4のEのように経済的理由で職人を雇えないという特別の場合は、自分で遺骨を清めることもある。「天王工」を雇う場合には、墓を掘る時に、「天王工」が鋤で初めの土掘りを3回した後、死者の子孫が土を掘って、棺を出す。その後、「天王工」に任せて遺骨を清める。

3 洗骨の用具

洗骨に使う用具には、鍋・米篩・鍬・鎬・鋤・柴刀・火草刀・草紙（粗い目の紙）・糞箕・木炭などがある。鍬・鎬・鋤は土を掘る時に使い、糞箕は土を運ぶ時に使い、柴刀・火草刀は邪魔になる草や雑木などを切る時に使うものである。また、鍋、木炭、篩などは掘り出した骨を乾かす時に使う。紙は骨をきれいに拭くのに使うものである。

洗骨に用いた用具は鉄製の物以外は捨てられるか、または燃やされる。鉄の物は農具であるから、また農具として使われる。その場合、用具を供養することはない。

4 洗骨の手順

洗骨の手順は、洗骨の時間や墓地の選択、洗骨の参加者などを清める準備の段階と、棺を掘り出して遺骨を清める段階とに分けられる。

まず、洗骨の準備の段階から述べていこう。

(1) 洗骨の準備段階

洗骨改葬は今年にしようと決めたら、風水師に依頼して墓地を探す（墓造りについては後述）。墓地が見つかったら、再び風水師に依頼して墓造りと洗骨の吉日吉時を決める。吉日吉時の選択は「通書」という暦の指示³⁾や、死者の「属相」⁴⁾、生者の「流年」⁵⁾、子供（男女を問わず、全員）の数、「山頭」（墓地の方向や形などの自然状況、例えば、山では獅子の形に似ている「獅形山」、牛の形に似ている「牛形山」などがある）と陰陽五行の関係などを合せて検討した上で決める。洗骨する時間は昼間が普通である。

その後、洗骨に参加する人を決める。洗骨に参加する人と死者の関係には2種類がある。1つは死者の子孫、特に死者の息子である。もう1つは死者と血縁関係にない者、即ち洗骨を手伝う者か洗骨をするために雇われた者である。洗骨に参加する人を決めるということは、死者の子孫

の場合についていわれる。洗骨する時、死者の子孫が必ず全員参加するというのではなく、参加してはいけない人もいる。参加するか否かは風水師によって決まる。決まりの方法としては、「吉日吉時」という洗骨をする日と時刻がその人の「流年」と「相衝」になるか否か、即ち、参加した後よくない影響をもたらすかどうかによって決定される。

洗骨の準備がこれで終わって、次は洗骨することになる。

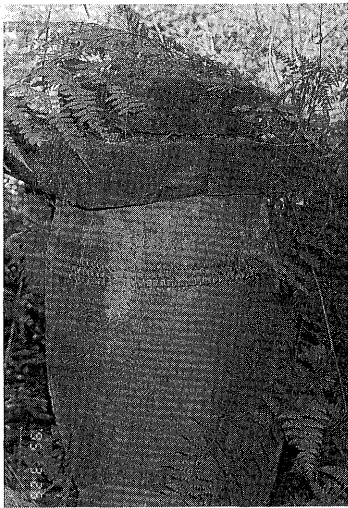
(2) 洗骨実行の段階

洗骨する前に参加者が身を清めたりはしない。他の儀式、例えば、線香を燃やしたり、蠟燭を点けたり、爆竹を鳴らしたりすることも表4に示したようにほとんど行なわれない。

洗骨は墓を掘ることから始まる。棺を掘り出したら、棺蓋を開けて、骨を取り出して清める。遺骨は太陽の光りに照射されてはいけないので、洗骨は全過程に傘を立てて蔭の下でする。遺骨を決める作業は前に述べたようにやむを得ないで自分がする場合以外、「天王工」か他の手伝い者に依頼する。血縁のある者が遺骨を触ったりすることはあまり良くないこととされている。

もし、腐肉が完全に落ちていない場合は、小竹板でそれを削ぎ落とす。鍋には、木炭を入れ、火を点けてある。取り出した骨は篩に入れ、鍋の上に乗せて乾かせる。乾かした骨を紙できれいに拭き、もう一枚の篩に足の骨から順序よく並べる。並べる時、骨をばらばらにしてはいけない、きちんと左の骨は左に、右の骨は右にというように身体の形に並べなければならない。

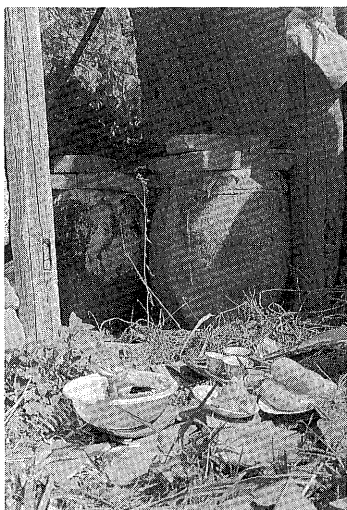
骨を乾かし終わったら、「金罍」「金斗」という甕に入れる。昔、遺骨を入れる前に、頭蓋骨の顔面を朱塗りにしたこともあるが、現在は朱塗りにしない。甕はおおよそ、高さ45～50cm、口の直径25～30cm、腰部の直径30～35cm、底の直径20～25cmの大きさがある（写真5、6参照）。骨を甕に入れる順番も、きちんと決まっている。順番はまず足の骨からいれ、左の骨を左に、右の骨を右に、順序よく入れる。その後、腿の方の4本の長太骨を下の2本を前に、上の2本を後ろに差し入れ、最後に頭骨を4本の足の骨に支えられる形に入れる。骨を全部甕に入れ終わったら、甕の口を赤い布で覆い、赤い糸で締めて、その上に3枚の煉瓦で蓋をする（写真5、6参照）。



【写真5】 仮小屋に入っている「金罍」

1つの甕には1人分の骨しか入れない。もし、遺骨が足りなかったら、あるものだけを洗骨して甕にいれ、代りのものを使わない。遺骨が全部無くなってしまっていた場合には、遺骨の代りに死者が男なら煉瓦に、女なら瓦に、「○世○氏祖公○○顕考（男性）、祖（太）婆（女性）○○孺人之霊位」と書いて、経済上余裕のある家は銀で小牌を作って、「金罍」に入れる。陪葬品などは捨てられる。

遺骨が入っている甕は、正式な墓がすぐに建てられる場合には、新墓地に運ばれる。正式な墓をすぐ



〔写真6〕 仮小屋に入っている「金罍」と供養の様子。供養は年一度の清明の墓参りの時に行われる。本来、供養はその家に所属する「金罍」の前で行われるべきであったが、仮小屋が半壊状になったために、どれが自分の家のものであるかはわからなくなってしまい、やむを得ずに小屋の入り口のところで供養をしたという。

建てることのできない場合には、置く場所を探して、墓を建てるまで、甕を仮にそこに置いておく。

洗骨が終わった後、潰した仮墓はそのまま捨てられる。棺は燃やされるか、溝などの上にかけて道路を作るのに使われる。更に、農家の穴のトイレの上にかけて、トイレ板として使われることもある。

5 洗骨を中断する場合

洗骨は途中で中止されることもある。棺の中に良い兆しであると思われる異物が入っている場合は、洗骨を中止するのである。異物が入っていることは、異物の種類によって、良い兆しと思われる場合もあれば、悪い兆しと思われる場合もある⁶⁾。蛇や蜘蛛などの爬行類動物や昆虫などが入っている時には、良い兆しと思われる。しかし、入っているものが「塘色」という魚（オコゼに似ている、名前は不明）などであると、悪い兆しと思われる。入っている異物が良い兆しと思われるものの場合は、洗骨をやめて赤い棉布、或いはこれに類似するものでそのまま棺を覆って、前のように埋め戻して、洗骨改葬をやめてしまい、埋めた上に墓を建てる。そうしないと、「気」⁷⁾が漏れてしまい、風水が悪くなると信じられている。但し、実際に中止した事例は稀である。入っている異物が悪い兆しと思われるものの場合は、洗骨を予定の通り行う。これについて、次のような噂が語られている。ある家で洗骨した時、棺を開けてみると、中には「塘色」がたくさん入っていた。この家の人は、いきなり魚を鎮の市に持って行って売ってしまった。その後、この家の運がずっと良くなかったというのである。噂の内容がほんとうかどうかは知らないが、蔡坊村ではこの魚が屍体から変化したものと信じ、今でもこの魚を食べない人が多いことは確かである。

次の場合も、洗骨を中断する。それは死体が全く腐乱していない場合のことである。この時は

棺の蓋を閉めて埋め戻し、洗骨しないまま、仮墓を正式な墓に建て直してしまう。死体を全く腐乱させない土地は、より風水の良い墓地で、「養屍地」、「蔭屍地」と呼ばれ、運が悪くなければ逢えない「風水宝地」とされているからである。

6 墓造り

洗骨改葬は一連の行事で、その一環として墓造りがある。蔡坊村では、現在、洗骨は墓を建てるための行事であるくらいに認識されている。このため、洗骨はほとんど墓造りを伴う。

従来、中国には陽宅と陰宅という思想がある。陽宅は人間の住む所で、陰宅は死者の住む所である。しかし、陰宅は死者の住む所だけにとどまらず、陽宅と同じように生者にも関わっている。良い墓を造ることができるかどうかは、先祖のお蔭が子孫に及ぶかどうかの問題になる。良い墓ができたら、子孫の繁栄、出世ができ、除災招福などもできる。逆に、もし、悪い墓を造ってしまうと、子孫は病気になったり、災害に逢ったり、繁栄、出世もできなくなってしまうと信じられている。このため、墓造りは中国特に南部中国の人々に重視されている。この点、蔡坊村の人々も変わらない。

墓造りは風水観念と深く関わっている。墓が良いかどうかの判断も風水原理によって決まる。だから、墓を造りたい時には、まず、「地理先生」と呼ばれる風水師に依頼して、風水の良い場所を探す。良い墓地の判断は地形、地勢、山形、山脈の方向、川の方角等による。同じ場所でも、その高さ、そこから見える川・山などの状況によって差がある。このため、良い墓地の判断は非常に難しい。

良い場所を見つけると、次には墓造りの吉日吉時を選ぶ。墓造りの吉日は一般に洗骨する日に合わせて考えるから、なるべく洗骨の同日あるいは翌日を選択する。墓造りの時期は、正月を除き、吉日であれば、いつでもいいが、一般的には、春と秋の農耕の暇な時、天気の良い時がもっともよい。

その後、洗骨して、墓を建て始める。墓を建てる際には、洗骨作業の時には行われない儀式がすべて行われる。このため、墓造りはかなり複雑な儀式を伴う。

まず、墓を造る時、遺骨を入れた「金罍」を墓穴に納める前に、「暖金」の儀式が行われる。「暖金」とは墓のそばの地面に1つの浅い穴を掘り、金と銀の色の紙を中に入れて火を点けながら、「金罍」を暖かくするように穴の中に入れることである。「暖金」をした「金罍」は、墓穴ができ、「吉時」の時刻になって墓穴に移されるまでは、「暖金」をした穴の中にそのままにしばらく置いておく。

墓造りは、煉瓦や石で墓の頭を造るなど、前半部の工事から始められる。墓の工事を始める前、「動土」の祈禱儀式を行う。この儀式は山神や土地神に、これから墓を建てることを報告して平安無事を祈禱する行事である。また、墓碑を立てる時は「堅碑」の儀式を行う。この儀式は「請神主」と「安神主」により構成されている。立てられた墓碑は、決まっている吉時になるまでは赤い布か赤い紙で覆い隠される。

その後は、墓の後半部の工事をする。後半部の工事は墓穴を掘ることから始まる。墓穴ができたら、甕を墓穴の中に納める「安金」をする。この「安金」は非常に大事なことであるから、必ず慎重に行う。甕が死者の長男か長孫によって墓穴に入れられる。甕の正面（中の頭蓋骨の顔が向かっている方向で、遺骨を入れる時点にわかるように印を付けておく）が、前方の墓碑を立てるところに向かうように入れる。甕を入れる時には線などを引いて測って必ず真中に入れ、わずかな誤差も許さない。入れた後、土で埋め、墓の隆起部の殻を造る（経済状況によって、煉瓦やセメントなどをを用いることもある）。この時には「落葬」の儀式を行う。これら墓の工事が全部終わった後、吉時になると、墓碑を覆い隠している赤い布か赤い紙を剥がし、「祭祖墳」の儀式を行って完了させる。

墓を建てる時には、「暖金」から「祭祖墳」まで、その全過程にあたって、6本の祭祀文が唱えられる。

墓を建てるには、複数の遺骸、例えば、夫婦の遺骸、親子の遺骸、兄弟の遺骸などを一緒にして1つの墓を造る場合もあれば、1人に1つの墓を造る場合もある。但し、後者の方が圧倒的が多い。後者の場合には、甕は墓の真中に置かなければいけない。複数の遺骸で1つの墓を造る場合には、甕を置く場所は、死者の立場にそれぞれ軽重があるため、間違えないように注意すべきである。軽重の決まりは、墓に向かって左の方が重となる。親子の場合は親の甕が左、子の甕が右に入れられる。夫婦の場合は夫の甕を左、妻の甕を右に入れる。兄弟の場合は兄の甕を左、弟の甕を右に入れる。兄弟夫婦の場合には2列にする。左列の前に兄の妻、後ろに兄、右の列の前に弟の妻、後に弟というように配列する。兄弟3人の場合は、真中を兄、左側を2番目、右側の3番目という順に配列する。

同日か翌日が墓造りの「吉日」とされない場合には、墓は後日の「吉日」と認める日に造ることになる。また、良い墓地が見つからなかった場合や、洪水・道路工事などの自然的・人為的不可抗力が原因で、急いで洗骨した場合にも、墓造りがすぐできないことになる。

こうしたいろいろな事情があって、やむを得ずに、墓を造らない、または造ることができないことがある。そうした場合には、しばらく甕のまま置いておく。甕を置いておく場所は家の事情によって違い、庭、山裾などの置ける所があれば、どこでも構わない。20年くらい前、村に離れた北東500 m くらいの所に小屋があった。これは甕置き用の仮小屋に利用されていた。当時、中には甕が20～30個入っていた。しかし、今この小屋は、甕が入ったまま半壊の状態になって放置されている（写真6参照）。

甕が仮小屋などに置かれる時期は、一定していない、何か月、何年、何十年間のこともある。さらに、甕はそのまま永遠的に置かれる可能性もある。

7 洗骨改葬しない場合

子供や、伝染病・疫病などの病気によって死亡した死者は洗骨改葬の対象者にならないために、洗骨改葬しないことは当然である。しかし、表4に載せてある例のように、正規の洗骨改葬対象

者の場合にも洗骨改葬をしないことがある。その原因について、話者が話してくれたがらないものを除き、主に以下の幾点がある。

(1) 経済的な原因

表4のA・C・H・Pの家が洗骨改葬をしなかったのは、経済的に困っていることが原因の1つである。

長汀県は山の中にある。交通は大変不便で、自然的資源も乏しいため、他地域との経済的交流がしにくい。県は昔は言うまでもなく、今でも福建省で有数の「貧困県」である。県全体がこの状況で、蔡坊村もその例外ではない。現在は経済事情が多少良くなったが、昔は多くの人々が最低水準の生活さえも維持できないようであったために、墓造りなど一定の経費を費やす洗骨改葬ができなかったことは当然といえよう。

(2) 政治的な原因

1949年以後、特に文化大革命の時の中国本土では、民俗を含め伝統的なものを封建的なものとして扱い、捨てるべきまたは破壊すべきとされた。封建的な行事を行うことも禁止されていた。また、国の「土地解放」（土地再分配）政策及び政治的身分付制度によって、建国前の土地の持ち主は、その所有地の量に応じて、「地主」「富農」「中農」「貧農」などの階級身分をつけられた。人口平均量分以上の土地を持っていた「地主」「富農」は政治的に差別された。この人たちが封建の行事とされた洗骨改葬などをすると、特に厳しく批判される。このため、「地主」「富農」という人たちは洗骨改葬などのことをほとんどしなくなった。これは表4のC家とS家が洗骨改葬をしなかった原因の1つである。

政治的な原因で、洗骨改葬などの伝統的行事へ顧慮しなければいけないことは、1970年代まで続いていた。その後、「改革開放」政策がとられるようになって、こんな顧慮は必要なくなった。

(3) 風水観念の原因

屋敷や墓などの風水が良いか悪いかは、家運や子孫の運命に関わっている。これは村の人々の民俗的生活の中の支配的な観念である。しかし、そうは言っても、1人も漏れなく風水のことを信じているというわけではない。風水観念が薄い者も確かにいる。

洗骨改葬の面においては、表4のM家のように、金をたくさん出して苦勞して「陰宅」を造るよりも、生者が住む「陽宅」をきれいにした方がいいと思う人間もいる。生者が「陰宅」のこと（良い墓を造ったら、子孫が繁栄できるなど）をあまり信じないため、洗骨改葬に熱心でないことは洗骨改葬に消極的な原因の1つである。

(4) 第一次の埋葬地の風水が良いという原因

風水のことをあまり信じないため、洗骨改葬しないのに対して、風水のことを信じているが、仮墓は風水の良い墓で、そのお蔭で子孫が繁栄している。もし、無理に洗骨改葬すると、逆に損になると言われた場合にもほとんど洗骨改葬しない。表4のN1はこの原因で洗骨改葬をしなかった。また、A1とC4が洗骨改葬されなかった原因の1つも、仮墓の風水が良いためであるという。

(5) 「虧房分」への配慮が原因

前項とも関連して、仮墓は風水の良い墓で、そのお蔭で子孫が繁栄している。もし、無理に洗骨改葬すると「虧房分」になるため、やめたということもある。これも洗骨改葬しない原因の1つである。表4のD家はこの原因によって洗骨改葬しなかった例である。

「房」とは宗族の支系のことである。ある人を始祖として、その子孫の初めての分かれがそれぞれ1つの「房」になる。「虧房分」とはある「房」を損じることである。

D1とD2は夫婦で、夫であるD1がD2より40年位前に死んだ。その後、洗骨の期間になった際、経済と政治のことを考えて、D1の息子たちが洗骨改葬をしようかしないかに迷っている時に、D2は今しないで将来私と一緒にしよう息子たちに勧言した。しかし、40年位経ってD2が死んだ時点では、曾孫までできて子孫はその家族も含め、何十人もいる（その時「一人子政策」は農村ではまだ実行していなかった）。その後、D2の洗骨改葬にもなった頃では、子孫が繁栄しているから、仮墓もいい墓にできていて、子孫がツイている。「検金做地」（洗骨して墓を建てる）は遠慮した方がいいと年長の親友に言われた。また、D1D2の子孫の中でも意見が二つに分かれた。人口の多い「房」は、やると自分の「房」に損を与えるかもしれない、即ち「虧房分」になるとあって、反対の態度をとった。このため、喧嘩もあって結局洗骨改葬をやめたという。

以上は死者が洗骨改葬の対象者であるのに、洗骨改葬されない原因である。但し、洗骨改葬がされない原因はどれかの1つだけに限らない、2つか3つが重なっていることもありうる。

四 洗骨改葬の機能

洗骨改葬の機能について、日本においては、これまでの研究の過程でさまざまな議論がなされた。一方、中国においても、洗骨改葬は祟りを取り除くためであるとかの議論があった。ここでは、福建省西部の洗骨改葬の機能についての筆者なりの考えを述べてみたい。

洗骨改葬の機能は主に祖先神化、死者再生への祈り、子孫の加護への期待という3つの面から考察しようと思う。

1 祖先神化

人間の行動は彼らが自覚するか自覚しないかに拘らず、必ず一定の目的を持っている。洗骨改葬は、単に遺骨をきれいにして保存するために行われた行動ではなく、その裏に深い意味が包含されている。洗骨改葬の行動の裏に包含されている意味はいくつもあるが、そのうち死霊を神格化しようとするのは最も重要な1つであると思う。

古来、中国人の精神世界には、天・地・人という理念が重要な位置を占めている。天は父であり、地は母である。人間を含め、世間万物はすべて天が地と交わって産み出されたものであるという。また、人々の信仰では、天上はカミの世界で、地下は幽冥或いは鬼魂の世界である。人間

は靈魂と肉体とを持ち、両者が一体になっているからこそ、生きていける。時には靈魂が肉体から離れることもあるが、靈魂が肉体から離れ、永遠に帰ってこない、人間が死になる。死んだ人間の靈魂は、特別な場合にはカミの世界へ行ってカミになれるが、普通には幽冥或いは鬼魂の世界に行き、鬼になる。鬼になった靈魂は穢れをもつので、鬼魂の世界にしばらくいた後浄化されなければいけない。その後、浄化した靈魂は再生するか、カミになるか、または両方ともになる道を辿る。

洗骨改葬の場合、死んだ人の靈魂は肉体から離れても、遺骨特に頭蓋骨からは永遠的に離れないと信じられている。その靈魂は生まれ代わることも祖霊になってカミになることも両方ともできるが、肉体が腐って消失しない限り、死の穢れが持ち続けられるので、再生ができなくなり、カミになることもできない。死体を骨化して洗骨しなければいけないという考えは、これに基づいたものではないかと思う。

長汀県蔡坊村の洗骨改葬は死霊を再生させるため、また祖先神化するために行われたのであると考えられる。蔡坊村の人々は、死者の再生のことを「投胎転世」と呼び（後述）、洗骨改葬を「檢金做地」と呼ぶ。「檢金」とは洗骨のことで、骨を拾う意味である。遺骨は金と呼んで宝物とされている。「做地」とは墓を造ることである。墓を造る時には前述したように、厳重な儀式が行われる。これは恐らく村の人々のカミに対する謹厳な心情によるものであろう。

洗骨改葬が死者を祖先神化するために行われたことを直接に裏づける根拠は二つある。まずは、前述した石碑を立てる際に「請神主」「安神主」という儀式を行なうことである。洗骨改葬された死者には、ここに現れてきた「神主」という言葉の通り、祖先神として扱われている。いま一つは、墓造りは結婚・出産・家造りなどと共に「喜事」（喜ぶこと、祝うべきこと）として行われることである。「喪事」である第一次埋葬の際には、最も親しい血縁関係者以外は埋葬地まで行かないが、墓造りの場合には親友も祝儀を持ち、「喜事」に使う赤色の爆竹を鳴らして墓造りの現場まで祝いに來ることができ、墓造りが終わると、主人が家で祝宴を開き、皆を招いて会食する。

このように、墓造りは「喜事」であると思われる。しかし、その「喜」はどこにあるか。墓造りの際に親友が墓までお祝いに來る。しかし、祝うべきことは何であろうか、またなぜ墓までお祝いに來るのであろうか。墓造りの工事が終わった後に宴を開いて慶祝するが、墓造りはどうして慶祝するべきなのか。これらの問題の答えは一つしかない。即ち、死霊が長い年月経ってやっと洗骨改葬され、再生できるように、祖先神化されるようになったからである。

2 死者再生への祈り

長汀県蔡坊村の人々は「投胎転世」という生まれ変わりの俗信を強く持っている。筆者は子供の頃に、「投胎転世」という説話を聞いたことがたくさんある。ある説話ではその人の前世の家世姓名という詳しいことまで語っていた。子供の頃に聞いた「投胎転世」の説話の中、2つのものが筆者に深く印象を与えていた。その1つは、川で水遊びをしてはいけないとよく戒められた

こと。それは水死した鬼が1周年以後、生まれ変わりのために身代わりを探さなければならないので、人が近づくと、引き込むためであるという。

そしてもう1つの話は次のようである。うちの村と15キロくらい離れたある村に王姓の家があった。その家の主人は妊娠している妻を家に残して出稼ぎに行き、妻の出産の時期を見計って家に帰っていった。帰る途中、遅くなって夜になった。一休みしようと彼が思って道の傍の「亭」という旅人の休憩所に入った。亭に入ってみると、中には小柄な人が1人いる。2人は挨拶し合った後、小柄な人が王姓の人に道のことを訊ねた。同じ道のため、王姓の人が案内して一緒に村へ向かった。しかし、王姓の人は同行する人の歩く様子が何となく不気味だと気づいた。よく観察してみると、その人は歩く時に足音がない。そして体が軽くて、空中で浮いているように動いている。王姓の人には彼は鬼だとわかった。しかし、恐ろしくても逃げてはいけない。もし、逃げたら、私が彼の真実のことを看破したと彼に知られ、きっと襲ってくるだろう。そして、今の様子から見ると、彼は私に悪意がないらしい。王姓の人はいろいろ考えた上、逃げない方がいいと決心して、彼にいろいろ話しかけた。2人は歩きながら話し合って、その鬼は自分の姓名・年齢・今までいた所・これからどこに行くかなどを、王姓の人に教えた。やっと、村口に到着したので、王姓の人は安心した。しかし、左右を見ると、今まで傍にいた鬼の姿がいつの間に消えてしまった。そして、ちょうどこの時、村の自分の家の方向から生まれた子供の初めての泣き声が伝来した。なるほど、彼が私の家に「投胎」に来たのかと王姓の人はわかった。

これらは筆者が子供の頃に何回も聞いたことがある説話である。同じような説話はこの村だけではなく、長汀県、更に福建西部の他の地域にも見られる。長い間、こんな説話はまったく馬鹿な話であると思っていた。しかし、今よく考えてみると、説話の内容はもちろん真実なことではないが、この説話は語る人の再生観を語っていることは確かであると思う。また、長汀県の人々は今でもよく子供のことを「小鬼」「細鬼仔」（細は小と同じ意味、仔は子と同じ意味）と呼んでいる。これも彼らの再生観を裏づける証拠の1つであろうと思う。

中国人の再生観は彼らの世界観に根づいている。元来、中国人は世間万物にはすべて生死があり、生は死に向い、死は生の始め、生と死とは密接に繋がって永遠的に円形の軌道に沿って循環しているという、いわゆる「周而復始」の世界観を持っていた。このような世界観に基づいて、中国人は、人間は季節の年々の循環、自然物の生々滅々と同じく、生には母である大地から生まれ、死には母である大地に戻り、このように絶えずに生死が循環しているというような生死観を形成していた。この生死観によれば、死は再生のために必要なエネルギー源を貯めることである。

このような生死観は福建省西部地域の人々にも、例外なく持たれている。彼らにとっては、死は、農作物が成熟して収穫されるのと同じように、生命或いは靈魂が人間世界から離れて母である大地に戻っていくことである。大地に帰っていったその生命或いは靈魂は、大地の母の懷の中でしばらく孕んで、いつかまた生まれてくる。これも、農作物の種が大地に蒔かれたら、生えてくるとのと同じことである。農作物を再生させるために、種を蒔く前に儀礼的な行事も伴うが、技術的な行事も行なわれる。例えば、稲の種を蒔く場合には、蔡坊村では「浸種」の行事が

行なわれる。「浸種」とは稲種を軽く洗って水に浸すことである。「浸種」は普通吉日吉時（一般に啓蟄の日で）を選んで行なう。従って、人間を再生するためにも一定の手続きが必要と考えられる。それが洗骨改葬である。このように、洗骨改葬はまた再生の契機でもある。

子孫から見れば、洗骨改葬の対象者は祖先であり、人間でもある。このため、洗骨改葬は、死霊を祖先神化するためであると共に、死者を再生させるためでもあるとの二重の意味を持っている。

死者を再生させるためには、なぜ洗骨改葬を必要とするのか、それはもちろんそれなりの理由があると思う。人間の死は穢れを伴うと思われている。中国人は死の穢れの観念を強く持っている。蔡坊村の場合には人の死んだ日から49日目まで7日間を1つの「七」として、それぞれ「頭七」「二七」……「完七」と数え、「七」毎に、特に「頭七」「五七」「完七」に死者祭祀や死の穢れを祓うなどの行事が行なわれる。四十九日の忌明けにあたる「完七」の儀式が終わるまで、死者のあった家に入ることは最も人に忌まれることである。その家に入ると、死の穢れに憑かれ、1年間運が悪くなり、災難に遭ったり、家畜家禽が死んでしまったりすることになる。もし、間違っただけで入ったら、家に帰った後、直ちに厄払いをしなければいけない。死の穢れは、「完七」・周年忌日の儀式が行なわれた後、だんだん軽くなっていくが、洗骨改葬が行なわれなければ完全には消えない。死の穢れが消失しない限り、死者は再生することができない。このことが、死者を再生させるために洗骨改葬が必要だとされた理由であると思う。

洗骨改葬の諸過程で行なわれる、「金罍」または「金斗」という骨壺の口を赤いものを以て封じることや、洗骨の時に天日に当たらないように傘をさすこと、「暖金」という儀式を行うことなどは、死者の再生に結びつく行事であると思われる。

福建省西部を含め、中国の多くの地域では、葬礼にはほとんど白か黒色のものを用いるのに対し、死者が息をひきとる前に着替える「寿衣」（死ぬ時に着る新しい衣服）の中に、1つ赤いものを使用する習俗がある。長汀県では、男性死者には帽子に赤色の球形のものを付けて被せ、女性死者は白い肌着と赤い上着に着替させる慣習がある。しかし、中国においては、赤いものは結婚・出産・家造りなどの「喜事」を慶祝する時に用いる聖なる色である。そのため、葬礼に際し、このように死者だけに赤色を使用することは、決して死そのものを慶祝するわけではなく、その裏に深い意味が隠されていると思う。その意味は恐らく死者がこれから再生へ向かうことができるようにと祝福するのであろう。さらに、骨壺の口を赤色の布などで封じることこの考えによったのであろうと思う。

中国では、他人の祖先の墓を潰して遺骨を暴露することは、死者と死者の子孫に与える最も大きな侮辱であり、最も禁忌されることである。洗骨の時に遺骨を天日に当たらないように傘をさす習俗は、中国人の祖先の遺骨が暴露されることに対する禁忌から生まれ出たものであるかもしれない。しかし、洗骨する時のこの習俗は、何となく長汀県の、出産する時にできるだけ外から光が入らないように部屋を密封する慣習を想起させる。また、産屋には「魘」（穢れの意味）があり、産婆・出産者の夫・面倒見る者（出産者の姑か息子の嫁か夫の兄弟の嫁）以外の人、特に

子供が入ってはいけないとされている。洗骨の際にも、担当者以外はあまり近づかない方がよいとされ、死者の子孫が遺骨に触ったりするとよくないとされている。両者が性格的によく似ていることは、両者が同じ原理に基づいてでき上がったものであることを暗示しているのではないと思われる。もしかして、洗骨する時に傘を差す習俗は、洗骨が死者の再生のための大事な行事であると思われて、出産する時の光を避けることに対応するように取られた象徴的な行為であるかもしれない。

「暖金」という儀式はなぜ行なわれるのか、これについては調査地である蔡坊村の人々（調査対象者に限り）は、「昔からこのようにやってきた」という以外の回答を得ることは出来なかった。但し、地元では結婚儀礼の中に、婚姻の日が決められたら、男の家が女の家知らせて、「闘床」というベッドを設ける儀式が行なわれる。この時、女の家では木炭などを持って男の家にお祝いに来る。木炭がこの時の贈り物として用いられる理由は、木炭に火を点けると新婚夫婦の居間が暖くなるので、この意味から転じて新婚夫婦の仲良きことを祈り、子供も早くできるように祈るためである。この習俗を見ると、婚姻儀礼において、長汀県の人々には、火から「暖」の機能を抽出して出生に結びつけるという考えがあると思える。そこで、「暖金」の儀式もこれと同じような考えに基づき、死者が早く再生できるように祈って行なわれたのであろうと考えられる。

洗骨改葬が死者の再生を祈っているということを考えるもう1つの有力な証拠は、遺骨を骨壺に入れる際、必ず左右を間違いないように順序よく入れることである。アメリカの研究者スチュアート・E・トムソンの指摘によれば、骨壺は子宮の代用品で、洗骨された遺骨は胎児のような形で、ねんごろに骨壺の中に入れられている（1994）。遺骨を入れる際にこのように丁寧にする理由は、恐らく死者の再生に支障がないようにするためであろうと思う。

3 子孫の加護への期待

洗骨改葬の機能は以上に述べた2点以外に、もう1つ重要なものがある。それは、死者の子孫が洗骨改葬することによって、神になった祖先に加護を望むことである。

洗骨改葬は死者への最後の孝行であるともいわれている。しかし、洗骨改葬の動機は決して単に死者への孝行という一方的な奉仕ではなく、生者のためでもある。死者のためであるという理由は、前の1と2で述べた祖先神化と死者を再生させることであるが、生者のためであるという理由は、子孫が祖先神に加護を求めること及び死霊が祟らないように望むことがある。

洗骨改葬に関する行事全体は、生者と死者と両方に関わっている。洗骨改葬における生者と死者との関わり合いからは、死者→祖先神→子孫に加護→生者というような図式を描くことができる。死者は生者によって行なわれる洗骨改葬を通して祖先神になり、その後、生者は祖先神になった死者によって加護される。祖先神の加護は生者である子孫に求められることであり、洗骨改葬を行なおうとする生者の原動力でもある。

蔡坊村では、祖先神は「太公太婆」⁸⁾と呼ばれる。村の人々には「太公太婆」への期待が非常に大きい。これは次に述べる事例を見てわかることである。村の人々（家族単位に代表者1人の

場合が多い)は、旧暦の毎年の元旦の朝に一族の先祖を祀る祠へ行って焼香して、新しい1年間の家族全員の平安無事、家運の繁栄などを祖先神に祈願する。家には一家の祖先神を祀る「神龕」という神棚を設け、平素に焼香をし、節日(節供)・祈り目には供養を行なう。家に何か良くないこと、例えば、家族員が病気したりや、家禽家畜が死んだり、外で怪我するなど悪いことに遭ったりすることがあれば、祖先神の加福を祈禱する。また、子供が生まれたら、焼香して「太公太婆よ、子供の無事成長を保護して」と祈り、子供が入学すると「太公太婆よ、子供が勉強を優秀にし、将来出世できるように見守って」と祈る。前に繰り返して述べたように、祖先神は洗骨改葬によって神の性格を得たので、当然に子孫を加護しなければならぬと要求される。祖先神がこのような大きく期待されることは洗骨改葬が生者のためでもあることを現わしているのではないかと思う。

洗骨改葬が生者のためでもあることは、死の穢れを清め、死霊の再生を祈って祟りが出ないようにすることを見てもわかる。

死の穢れが清められないと、祟りが出て生者が災難にあたり病気にかかったりするので、洗骨改葬しなければならないという考えは、かなり古い時代からあった。事例として、『梁書・顧憲之伝』『列伝46』に「又土俗。山民有病。輒云先亡為禍。皆開塚剖棺。水洗枯骨。名為除祟。」のような記事がある。この記事によると、5、6世紀の衡陽地方の「山民」は、病人が出た時に洗骨していない故であると思って祟りを取り除くために洗骨したという。このような例は他にもいくつかあるが、紙面の関係でここに列挙できない。

同じような考えは現在の蔡坊村にもある。但し、対応の方法は洗骨改葬の対象者とされているか否かに応じて変わる。蔡坊村では、家運が悪かったり、災難や変なことがあったりして、その原因が洗骨改葬されていない死者の霊の祟りによると思った時には、そしてその祟りが洗骨改葬の対象者の死霊から出たとされる場合には、早速吉日を選んで洗骨改葬を済ませる。但し、こういう例は滅多にない。一方、祟りが洗骨改葬の対象者でない死霊から出たとされる場合には、占いに祟る原因を訊ね、占い者の指示に従って祟りを取り除くか、僧・道士を家に呼んで祓いをする。占い者の指示に従って祟りを取り除く方が一般的であり、これは「文化大革命」のような厳しく禁止されていた時代にも密に行なわれていた。

祟りを取り除くために行なわれる洗骨改葬は、死者のための行事というよりも、むしろ生者のための行事といった方がよいと思う。また、祟りを取り除くための洗骨改葬の目的は、除災招福である。祖先神の加護を期待するのも除災招福のためである。両者には性格上相違はない。

五 沖縄文化圏の洗骨改葬との若干の比較

沖縄文化圏の洗骨改葬と南部中国の洗骨改葬とは類似点が多く歴史的関係が深いと思われるが、儀礼作法の面においては、類似点もあれば、差異点も多い。両地域の洗骨改葬の比較研究はすでにある程度は行なわれているが、今までの比較研究は主に両者の類似点に注目して、両地域の影響関係を問題にしていた。ここでは従来の研究の視点から離れ、両地域の洗骨改葬の差異点

に注目して若干の比較を行ないたい⁹⁾。

1 洗骨作法の差異

沖縄文化圏の洗骨の作法は、私の調査した福建省西部の洗骨の作法と異なる所がかなり多いが、主な差異は次の諸項に現れてくると思う。

(1) 洗骨改葬の対象者

沖縄文化圏の洗骨改葬の対象者は、宮古島の狩俣部落のように病死者・変死者・子供死者などの一部の死者に限定するような特別の例を除けば、ほとんど死者全員である。これに対して、福建省西部の洗骨改葬の対象者は、原則的には死者全員であるが、実際には子孫のいる死者だけに限られている。特に、福建省西部では病死者・変死者・子供死者などの非正常死者は全く洗骨改葬の対象者とされていない。

(2) 洗骨に携わる者

この点においては、沖縄文化圏の洗骨改葬と福建西部の洗骨改葬との差異が大きい。

沖縄文化圏の場合、洗骨に携わる者は儀礼に参加する人々、実際に遺骨を清める人、最初に手をつける人、頭蓋骨を抱く人、墓口を開く人などに分けられる（名嘉真宜勝1968）。その中から、3つの重要な特徴が見出せられる。①特別な例を除き、洗骨に関係する者はほとんど死者と血縁的な関係を持っている。②洗骨改葬において、女性の役割が極めて重要である。③遺骨を清めることは血縁関係者、特に女性の血縁関係者によって行なわれる。

これに対して福建省西部の場合、沖縄文化圏の場合と異なり、洗骨に参加する者は血縁関係のある人と血縁関係のない人によって構成される。その中から見出せる主な特徴としては、特別の場合を除き、一般に、①洗骨に関係する者は必ずしも死者と血縁的な関係があるわけではない。②女性は洗骨改葬と関わっていない。③遺骨を清める作業そのものは、必ず血縁関係のない者によって行なわれる。

(3) 洗骨の手段

沖縄文化圏において、何によって洗骨するかには地域差があり、必ずしも一定していない。この点については中国においても同じである。但し、南西諸島では水を用いて遺骨を清めることが最も一般的であり、福建省西部では火を用いて遺骨を清めているので、これを両地域の洗骨の手段の差異として考えてよい。

(4) 遺骨が足りない、または無くなった時の対応方法

洗骨する際、遺骨が足りない、或いは遺骨が無くなっていることもたまに起きてくる。この時、沖縄文化圏の人々の対応方法は福建省西部の人々の対応方法と違っている。沖縄文化圏では、遺骨が足りない場合には、遺骨の代わりとして、墓壙内の棺の安置してあった箇所（石塊）を足りない骨の数だけ拾って、ほかの遺骨と一緒に厨子甕に入れる。宮古島では、遺骨が無くなった場合に、その石を7個拾って厨子甕の中に入れておく。また、遺骨が無くなった場合、例えば、他郷で死んでしまった人で、その遺骨を求めえない場合は、死んだ場所の石塊か土塊を遺骨代りに拾っ

てきて埋葬する（桜井徳太郎 1972）。

福建西部の人々の対応方法はこれと異なる。遺骨が足りない場合には、あるものだけを清めて骨壺に入れて改葬する。遺骨が無くなった場合には、遺骨の代りに、煉瓦か銀塊に死者の名前など必要な事項を記入して骨壺に入れて改葬を行なう。

沖縄文化圏の洗骨改葬と福建省西部の洗骨改葬との差異点は、もちろん、細部にまでわたればほかにもいろいろあるが、主に以上の諸項であると思う。

2 洗骨作法の差異発生の要因

両地域の洗骨作法の差異の発生は、それぞれの民俗文化伝統、人々の祖先観、死霊観などに関連するだろうと思う。前に挙げた諸差異点の中、(3)の差異は単に用いるものが異なっているだけで、意味上の本質的な区別ではないと思われるので、差異発生の要因の分析は(1)と(2)と(4)を対象として行なう。また、両地域の洗骨作法の差異発生の要因の考察は沖縄文化圏のことにも多少触れるが、主に福建省西部側の要因について分析してみたい。

(1) 洗骨改葬対象者の差異発生の要因について

前にすでに述べたが、洗骨改葬の機能は、死霊を祖先神化することが1つの重要な目的である。このため、人々がどの範囲の死者を洗骨改葬の対象者とするかは、彼らの祖先観念に繋がっている。沖縄文化圏と福建省西部において、死者全部を洗骨改葬対象者とするか死者の一部だけを洗骨改葬の対象者とするかは、死者全部が祖先神になるか、もしくは死者の一部だけが祖先神になるかという考えに繋がる。両地域の洗骨改葬対象者の差異は、実に両地域の人々の祖先観念の違いによるものであらうと思う。

第3者の立場から考えれば、福建西部の洗骨改葬には、直系血縁者の子孫でなくてもしたらよいではないか、なぜ南西諸島のように兄弟姉妹なども洗骨改葬を行なうようにしないで、冷酷無情に子孫のいない死者を投げ捨てる洗骨改葬の制度を形成していたのか、などの疑問があるかも知れない。これらの疑問は、実は福建西部の人々がなぜ子孫のいない死者の洗骨改葬を行なわない、即ち、なぜ子孫のいない死者を祖先として扱わないのかという問題でもある。答えのカギは、中国人の「孝」という観念の支配と福建西部地域社会の親族組織の構成方式や祖先祭祀の仕組みなどにあると、筆者は思う。

中国は儒教の国であると言われてきた。中国では2000年間もの長い間、儒教思想が、為政者によって提唱され、国を治める道具として利用されていて、民間にも受容されていた。儒教思想の中には重要な道德倫理観の1つとして「孝」というものがある。孝という観念は長期にわたって家庭の道德倫理観として中国人を支配していた。

孝は子孫の父母や祖先に対する態度や行為のことで、その意味については主に2つの面から理解しうる。第1は最も基礎的な面で、父母や祖先の物理的な生命を代々永続させることである。第2は父母や祖先の精神的生命、即ち父母や祖先の社会・道義的意義の生命を永続させることで

ある。父母や祖先の物理的な生命の永続は、結婚して男の子を育てることなどを通して実現する。父母や祖先の精神的生命の永続は祭祀によって実現する。後者の実現は、前者を前提とする。このため、中国では特に漢民族の人々が「不孝有三、無後為大」（不孝であることが三つあり、その中、後継者である子孫のいないことは最も重大なのである。——孔子より）という観念を持っていた。孝のこの観念に基づいて、中国では子供、特に男の子が多ければ多いほど、「福」があるという「多子多福」の考え方も生まれ出た。

子供のいないことは、父母や祖先に対する最大な不孝である。不孝は重い罪でもある。これは福建省西部の人々が子孫のいない死者の洗骨改葬を行なわない原因の重要な1つであろうと思う。

福建省西部の人々が子孫のいない死者の洗骨改葬を行なわないもう1つ重要な理由は、福建省西部の親族組織の構成の方式とそれによってできあがった祭祀の仕組みなどに関係があると考えられる。

福建省西部の伝統的社会的親族組織は「宗族」という父系出自集団である。「宗族」は「房」という父系直系の血縁関係者のグループによって構成される。「宗族」の組織の構成には、父系直系の血縁の純粋で正しいこと、即ち血統の「正統」性が重視される。

従来、中国人は強く「正統」という観念を持っている。正統という観念は、政治的な面のものと民俗的な面のものとに分けられる。政治的な面の正統観念は、主に国家政権を支配している人々が漢民族であるかどうかのことから判断される。国家政権を支配している人々が漢民族であれば、その政権は正統であると思われる。民俗的な面の正統観念は、主に親族組織成員、特に相続者と被相続者の血縁関係から判断される。例えば、やむを得ずに、養子をもらわなければならない場合は、出来るだけ血縁関係のある者、兄弟からもらうことはこの正統観念によるのである。しかし、兄弟の子供は血縁関係があるとはいえ、その血縁関係は傍系であり、直系ではない。このため、養子に跡取りの資格を与えるために儀式を行なわなければならない。この点において、福建省西部では特に重視されている。

福建省西部では、親族組織のこの特徴により、祖先祭祀は父系直系の血縁を持つ子孫によって行なわれる。これについて蔡坊村の蔡姓の人々の例を挙げてみよう。蔡姓の人々の祖先祭祀は、清明の日の始祖の墓参りを中心として、清明の前後の2日にわたって、他の世代の祖先の墓参りを合わせて5日間をかけて行なう。始祖の墓参りの時は、隣の村に移住した蔡姓の人々も参加しに来る。他の世代の祖先の墓参りには、その祖先の子孫だけが参加する。このように世代を下って祭祀に参加する子孫の範囲もだんだん小さくなり、最後に1番小さい単位の祖先の墓参りを行なう。祀る子孫のない傍系である伯叔祖父母の墓参りはこの間には行なわれなくて、穀雨の日に世代を問わずにまとめて行なわれる。この時、無主の墓、即ち祀る子孫のない墓をも、ついでに簡単に整理してあげることもある。

蔡坊村の蔡姓の人々の祖先祭祀において、祀る子孫のない傍系である叔伯祖父母の祭祀を祖先祭祀と一緒に行なわないことから見ると、傍系である伯叔祖父母は祖先として扱われていないと

考えることができるだろう。子孫のいない死者が洗骨改葬されないことは、この祭祀の仕組みと同じ考えに基づいて形成されたのではないかと思う。

もちろん、福建省西部の人々が子孫のいない死者の洗骨改葬を行わない原因について、他の角度からも解釈できるかも知れないが、その根本的な原因は、以上、述べた孝という観念の支配と、親族組織の構成や祭祀のあり方によると思う。

(2) 洗骨に携わる者の差異発生の要因

前項のところに述べたように、沖縄文化圏と福建省西部において、洗骨に携わる者の差異は、主に洗骨儀礼に参加する者の血縁関係、遺骨を清める者の性別と血縁関係、洗骨儀礼における女性の役割という3つの面に現れている。3つの違いの中、洗骨儀礼に参加する者の血縁関係の問題と女性の役割の問題は、実際に遺骨を清める者の性別と血縁関係によって引き起こされたものである。核心的問題は、遺骨を清める者が血縁関係のある女性であるか、血縁関係のない男性であるかという差異に絞られる。次に、この差異の発生の要因について述べてみたい。

福建西部における遺骨を清める者について、2つの問題が見出せる。1つはなぜ遺骨を清める者が血縁関係のない男性でなければならないのかであり、もう1つはなぜ女性が洗骨改葬に参加しないのかである。

前の問題について、2つの角度から考えられると思う。

まずは中国人の家庭道徳倫理観に基づいた原因である。先ほども少し述べたように、従来、中国では儒教の孝などの思想の影響を受けて、父母や祖先に対する尊敬・服従の家庭道徳倫理観を形成した父母や祖先は家庭において絶対的な権威を持っている。子供、子孫が父母や祖先に背いてはいけないとされている。儒教のこの家庭道徳倫理観によって、「家諱」という制度が生み出されている。家諱とは子供や子孫が父や祖先の名前を直接呼んではいけない、父の名前にある字を書いたり、用いたりしてはいけないことである。父母、長輩をかってに触ったり、父母、長輩の所有物をかってに移動したりすることも不敬・不孝とされる。父母や祖先が死んでしまっても、遺骨はその身体の一部であるため、子供、子孫ができるだけ触らない方がよいのである。遺骨を清めることが血縁関係のない者によって行なわれなければならないのは、このためであるのではないかと思う。

次は死の穢れへの恐怖による結果であろうと思う。蔡坊村を例とすれば、前に述べたように、村の人々は死の穢れに対する忌みが非常に強い。遺骨には当然穢れがついていると思われるので、洗骨は自分がしないで、呪術的力を持つ人間であると思われる「天王工」という喪葬手伝いの職人に依頼する。

ちなみに、洗骨改葬は死者を再生するためでもあるとの意味から見れば、遺骨を清めることは死者の再生への要である。この点から見ると、遺骨を清める者は、ある意味では死者を生まれ変わらせる親とも言える。死者の子孫である者が洗骨をすれば、死者の生まれ変わりの親になってしまう。これは倫理に背くことで許せないことである。他人の手を借りて洗骨を行うことはこのためであろうと考えられる。これは筆者の大胆な推理に過ぎないので、ここでは参考として述べ

ておくだけである。

次の問題、福建西部の洗骨にはなぜ女性を関与させないかという問題は、中国の伝統的社会における男女の地位の不平等さと関わっていると思う。中国の伝統的社会は男性中心の社会で、女性は社会生活のすべての面において地位が低い。冠婚葬祭の重要な儀礼において分担する役割が男性より軽いことも、これと関係するのであると思う。

福建省西部の洗骨改葬において女性が関与しないのに対して、沖縄文化圏の洗骨改葬には女性が重要な役割を分担している。これは沖縄文化圏の伝統的社会において、女性の役割が重要であったことと関連するのであろう。沖縄文化圏の伝統的社会の女性の役割については、沖縄文化圏の民間信仰であるオナリ神信仰から窺える。

オナリ神は、沖縄において兄弟を守護する姉妹の霊である。姉妹が兄弟に対して、常に霊的に優位すると信じられ、強い守護霊的力を持っている。兄弟は、旅に出る際や、危険が多い遠島への帆船航海、戦争に行くなどの時に姉妹の身につけていたものや、姉妹が作った千人針、姉妹の毛髪などをもらって身守りとして利用する（鎌田久子 1990）。また、オナリ神信仰は祭祀や社会生活にも影響を与えている。八重山では各家庭の火の神や、初収穫者をめぐる祭祀において、戸主の姉妹が主役を担当する。また、姉妹が宗教面を主導して兄弟が世俗面を主導する形態は、集落の次元でも国家の次元でも広く認めうという。例えば、1部落が単一の祭団であっても、複数の祭団であっても、祭団の本家筋の家長がマネージャーで、その姉妹が司祭者であるのが少なくとも理想的な形とされることは、国王に対し、その姉妹が王国の最高神官だったことに対応するのである（『日本民俗辞典』1989年版）。

洗骨改葬は、死者の霊を守護霊にさせるための宗教的行事でもある。この行事が女性によって行なわれることは、女性（姉妹）が宗教的面を主導することと関連するであろう。

以上に述べたことから見れば、沖縄文化圏と福建省西部の洗骨改葬において、洗骨に携わる者、特に実際に遺骨を清める作業にタッチする者が、血縁関係の有無と女性の役割との2面で差異を生じさせた要因は、両地域の民俗文化背景が異なるためであることと推測できる。

(3) 遺骨が足りない、または無くなった時の対応方法の差異発生要因

洗骨する際に、遺骨が足りない、または無くなった時の対応方法における、沖縄文化圏と福建省西部との差異は、両地域の人々の死霊観が異なっていることによって発生したのではないかと思われる。

沖縄文化圏の遺骨代りとして、墓壙内の棺の置いてあったところ、または死んだ場所の石塊か土塊を埋葬することは、「たとえ骨が朽ちても、死者の靈魂は、その遺体の下の土に付着してのこっているから」¹⁰⁾という考えに基づいているのであろうと考えられる。

一方、福建省西部では遺骨の足りないまま、または遺骨代りとして他所から煉瓦や銀塊を持ってきて「金罍」に入れて埋葬することは、おそらくこの地域の人々の「霊肉分離」の観念と関連するであろうと思う。

「霊肉分離」とは、人間は肉体と靈魂と両方とも持っている。靈魂は人の肉体に付いている限

り、人が生きている。もし、靈魂が人の肉体から永遠的に離れていくと、人が死になる。死んだ人の靈魂は幽冥或いは靈魂の世界に行ってしまう。これについては、前の四の1のところにも若干触れておいたので、ここではこれ以上贅言しない。

この觀念を見れば、福建省西部の人々は、死んだ人の靈魂は、その人が死んだ時点から死体に付いていないため、たとえ死体が埋められ、遺骨が無くなっても、埋めた場所には残らない。但し、靈魂は死体と全く関係がないというわけではなく、死の穢れがついている死体は骨化して清められない限り、死霊が再生や祖先神になれないというような考えを持って洗骨改葬を行っていると推測できる。福建西部の人々が、死者の遺骨が足りないまま、或いは遺骨代りとして他所からものを持ってきて骨壺に入れて改葬する原因はおそらくここにあると思われる。

おわりに

以上、筆者の現地調査によって得た資料を整理しながら、沖縄文化圏の洗骨改葬との若干の比較を付け加えて、現行習俗としての福建省西部地域の洗骨改葬を長汀県蔡坊村の事例を通して論じた。しかし、これはあくまでも大筋なものに過ぎない、福建省西部地域の洗骨改葬は個々の細部には県によって異なる点があるはずである。さらに、村によって異なる点が現れてきてもおかしくない。

筆者の蔡坊村の現地調査の分析から、結論を簡単に述べると、福建省西部地域においては

- (1) 洗骨改葬は制度化・慣習化されたもので、従来「福建省あたりは墓の風水が悪くて、その墓が適当ではなく取り壊さなければいけない、移動しなければいけない時に限って洗骨が行われます。」¹¹⁾と指摘されたようなものでは決してない。
- (2) 洗骨改葬は風水觀念に非常に密着している。
- (3) 洗骨改葬は死者のためであるが、生者のためでもある。
- (4) 中国においては死者の洗骨改葬は、生者の政治・経済状況にも関わっている。

などのことを指摘することができる。

また、福建省西部地域の洗骨改葬は沖縄文化圏の洗骨改葬と共通点もあれば、差異点も多い。本稿はその差異点に着目して、若干の比較を行ってみた。この比較によってわかったことをいくつか箇条書きで要約すれば、次のようになる。

- (1) 両地域の洗骨作法の差異は、主に①洗骨改葬の対象者の範囲、②洗骨改葬儀礼に参加する者、特に実際に遺骨を清める者の死者との血縁関係、洗骨改葬における女性の役割、③洗骨の手段、④遺骨が足りない場合の対応方法などの点にある。
- (2) 両地域の洗骨作法の差異発生要因の分析から見ると、両地域の人々の祖先観や死霊観には大きな差異があると考えられる。
- (3) 両地域の人々の祖先観・死霊観の差異や洗骨改葬における女性の役割などから見れば、沖縄文化圏の洗骨改葬は、南部中国の洗骨改葬の影響を受けたとしても、その影響が主に表面にあり、内面への影響は少ないと考えられる。

南部中国の洗骨改葬の研究、特に現行習俗を詳細に実地調査した上での研究はほとんど行なわれていないため、現在中国において、洗骨改葬はどの地域に分布しているか、各地の洗骨改葬はどのように行なわれているか、などについては極めて不明の状態になっている。また、福建西部の洗骨改葬に関しても、地域の全般的な調査をしなければならない。そして、その歴史や、祖先祭祀との関連、地域内の地域差などをも検討すべきのである。沖縄文化圏の洗骨改葬との詳細な比較をも含めて、これらの問題は今後の課題としたい。

注

- 1) 村人の「寄土」の解釈が正しいかどうかには疑問がある。『客家風情・続集』（黄順炳ほか 1994 海潮摄影芸術出版社）によれば、「寄土」とは埋葬ではなく、棺を地面に置いて、周りに石や土などで塀を築いて棺を隠すことである。
- 2) 郭啓熹1993「客家人与遷徙文化」『汀州客家研究』 汀州客家研究会編P38
- 3) 暦は「通書」のほか、「黄暦」「皇暦」とも呼ばれる。暦の内容については、1年間の月・日について、予知される自然現象、24節気、年中行事のほか、時刻・方位の吉凶、建築・人生儀礼など各種の行なうことの安否など、陰陽思想・風水信仰に関わるものも記入されている。
- 4) 中国では、鼠・牛・虎・兎・竜・蛇・馬・羊・猴（サル）・鶏・狗（イヌ）・猪（ブタ）を順番に一種ずつ十二支に配置して12の属相がある。人の生まれ年がどれかにあたるとその属相になる。12属相の間には相生相尅のことがあると信じられている。
- 5) 流年とは簡単に言えば1年間の運である。年運のよくない（流年不利という）人がどんなことをしていけないとかは暦に記してある。
- 6) 棺に入っているものは同じとしても、いい兆しであるか悪い兆しであるかの解釈は人によって変わることもある。
- 7) 「気」というものの解説は、とても難しい。儒、道、仏、そして、陰陽五行の解説は、それぞれ異なっている。ここに言う「気」というものは、墓の中に閉じられた家運や、健康などに関わる抽象物である。良い墓の中には、「地気」、即ち、「気」が閉じている。この「気」が漏れると、家運が悪くなり、人の健康もなくなり、更に、災害に逢ったり、子孫の代々継続もできなくなったりすることになると信じられている。
- 8) 長汀県では太公太婆という言葉の意味が二つある。一つは曾祖父母に対する呼び名である。もう一つは祖先を指す一般的な呼称である。
- 9) 本来、沖縄文化圏の洗骨改葬についても簡単に紹介すべきであるが、紙面の都合で、ここでは省略する。
- 10) 桜井徳太郎 1972 「宮古島本島の移葬・洗骨・墓制」『民俗学評論』第9号P8（738）
- 11) 名嘉真宜勝 1989 「葬法と洗骨—中国・台湾・韓国の洗骨習俗」『シンポジウム 南島

主要参考文献

- (1) 鎌田 久子 1990 『女の力 女性民俗入門』 青娥書房
- (2) 桜井徳太郎 1972 「宮古島の移葬・洗骨・墓制とくにクツヲウツァス習俗について」『民俗学評論』第9号 大塚民俗学会
- (3) 名嘉真宜勝 1968 「沖縄の洗骨習俗—分布・呼称・時期について—」『日本民俗学会報』58
- (4) 同 1969 「沖縄の洗骨習俗—その2・3の儀礼について—」『流大史学』創刊号
- (5) スチュアート・E・トムソン「死、食品、そして一族の繁栄」『中国の死の儀礼』J・L・ワトソン／E・S・ロウスキ編・西脇常記ほか訳 1994 平凡社
- (6) 大塚民俗学会編 『日本民俗学事典』(1989年版) 弘文堂

新刊紹介

福永光司著

『馬の文化と船の文化—古代日本と中国文化—』

道教が古代の日本文化に与えた影響を道教文献を縦横に駆使して論証してきた氏が喜寿を自祝自省するために編んだと後書きにあるのが本書である。日本の古代に中国から伝来した五点セット、水田稲作農耕・金属器文化・魚撈文化・医療文化・ト占文化が北回りと南回りのルートで渡来したとし、それぞれを馬と船で代表させ、その内容を主に文献資料に拠り考証していくという構成である。その結果として北方の馬(に乘る)文化は太陽を男性とし、左より右、柔より剛、曲より直の男性原理の社会を、南の船(に乗せる)文化は人間の作為より大自然の法理に身を任し、太陽を女性と考えるような母系文化を形成したと中国思想史、中でも老荘思想の碩学らしい結論を提示している。これらが講演や求められての短文を纏めて編まれているのでそのエッセンスだけを食すような読み

やすい内容である。民俗学徒から見ると文献中心の解釈が過ぎるとの印象を持つ部分もあるが、個々の事例の実証を離れて騎馬民族説のようにアジア的視野から日本文化を鳥瞰するところに著者の主眼が読み取れる。氏が団長の東アジア文化交流史研究会の一員として馬王堆遺跡から海南島まで旅したとき、雲南の思茅でここまでが道教の世界だ、これからは民俗学の世界だと言われた事が耳に残っている。その折りの成果は『倭と越』(1994.5東アジア文化交流史研究会)やシンポジウムの再録として『東アジアの古代文化』(1994.4大和書房)に纏められ、本書にも収められている。同行中、道教を専攻すると気力が増すのかと思われるほどの活力に溢れていた氏を思いながら一気に読み終えた。

(佐野賢治)

B6判 343頁 1996.1月刊 人文書院 2,884円